

# お話を聞く

先日ある会議に出ました。会議のテーマは「我慢する力」とか「ねばりづよさ」とかを持った子どもに育てるにはどうしたらよいか、ということでした。席上、市内の小学校の校長先生が「朝礼で話をするのだが、立って聞くようにさせたほうがいいか、腰を下ろして話を聞くようにさせたものか・・・。」と、私たち出席者に問い掛けられました。全校朝礼で校長先生のお話を聞くのは、子どもたちがその内容を受け止めることが大事であって、我慢することやねばりづよさを育てるためでないことは明らかです。折角の校長先生のお話を苦痛を耐える修行の場にしてしまうのは、実に残念なことです。その時思い出したのは、今月の礼拝でのKくんからの申告ハプニングでした。

1月21日の礼拝でのことです。私は12歳になったイエス様がお祭りでエルサレムに行ったときの話を話していました。話が後半にさしかかったとき、Kくんが急に席を立て、ツカツカと私のところに来ました。そして私の顔をまっすぐに見上げながら、「園長先生、すこしお話が長いんですけど。」と言ったのです。その後Kくんは私のそばにいて、立ったまま最後まで話を聞き、椅子に戻りました。確かに私自身も今日はお話の時間が長いと感じていました。だから「ごめんねKくん」なのです。そしてこれはほほえましいエピソードです。けれども私は、そこにKくんの大きな育ちを見出すことが出来ました。その感動を今でも味わい続けています。

1学期のKくん(だけでなく、ほかに何人も)は、礼拝のお話の途中で立って遊び始めていました。でも2学期半ばになったとき、礼拝で話している途中で、Kくんが「園長先生、オモシロイ!」と叫びました。Kくんは話を聞く楽しさを知ったのです。Kくんの叫ぶ声と光る目を見て、私はとてもうれしかった。そしてこの1月の「お話が長いんです」が起きました。話を聞く楽しさを知り、話を聞く力が育ってきたKくんでした。しかしあの日の話の長さはKくんの手には余ったのです。そのときKくんはそれを自覚し、そのことを申告したのです。Kくんは話が面白くなくなったのでもないし、飽きたのでもないのです。もしそうであったなら席を立て遊んだり、いたずらをしたことでしょう。Kくんの気持を丁寧に述べればこういうことだったと私は思うのです。「園長先生、ボクは今までお話を楽しく聞いていたよ。でもボクにはここまでが限界なんだ。お話は続くんでしょう? 続けて聞きたいけれど、それがむずかしいのでボクは困っているよ」。Kくんは私のところに来てそれを訴えたのだと思います。そして最後まで私の横に立って話を聞きました。Kくんはもっとお話を聞きたかったのです。でもそれが大変だったのです。ここにKくんの本気の葛藤を見た気がしています。

聞く力が育ってくるから話が聞けるようになるのだということを、改めてKくんから教えてもらいました。また、改めて『待つ』ことの大切さも教えてもらいました。もちろん1学期のころ、礼拝のお話のあいだに立って遊びだしてしまうKくんに、私たちは椅子に戻るよう働きかけ、促してきました。でもKくんが礼拝でお話を聞けるようになったのは、私たちの働きかけや促しが効いてきたからでなく、Kくんに話を聞く力が備わってきたからなのだと思うのです。私たちの『待つ』は、このことを待つのです。私たちはこの力を育てようとして力を注ぐのです。私たちはとかく従順に座っている、形の上だけのことを求めがちです。そして焦って、待てなくなって、形だけを強いることをしがちです。でもそれは子どもの本当の力を育てることにならない場合が多い。苦痛に耐えて形だけの我慢を強いることは、けっして我慢する力を育てることにはならない。むしろ逆の結果すら招きかねないと私は思っています。